

技術的知識としての実用語学： 翻字とタイ語早見表を例として

林 哲 也

1. 序言

書誌・索引・目録情報の、作成・流通に携わる者には、語学に関する技能・知識が必要である。通常、「実用」語学といえば、読み・書き・話すといった運用能力を指し、それを伴わない「教養」語学は役に立たないものとみなされがちである。しかし、個別言語の運用能力とは別次元で、広く浅く多種類の言語をメタ・レベルで取り扱う技術的知識も、それなりに有用なものである。この、もうひとつの「実用」語学、いわば「実用メタ語学」を開発・普及することの必要を提唱することが、本稿の目的である。具体例として、試作中の翻字法入門、および、タイ語の早見表を提示する。

2. 語学と翻字を考える

2.1 語学学習と語学マニュアル

2.1.1 書かれ難きもの、外国語上達法

外国語の学習に多大の時間と労力を費やしても、なかなか望みどおりには上達できない場合が多い。なぜだろうか？ 思うに、切実な必要に迫られてもおらず、使用目的もあいまいなままに学習を始めてしまっているせいではなかろうか。日常生活あるいは業務上、その言語を使わざるを得ない状況・環境に追い込まれば、多くの場合、なんとかそれなりに（切実さの強度に応じて、分相応の範囲内のレベルで）使えるようになるもので、必要がなくなれば、たちまち忘れる。使わない道具は錆び付く。人は、関心のないものは覚えられないし、常用しない技能は身に付かない。そして我々の多くが現実に置かれている状況は、中途半端な程度に「必要」といったところだろう。死活に関わるほど切実な必要に迫られているわけではないから、あまり時間も労力もかけたくない。けれども、一応の必要性は認めているから、現在の自分の技能レベルについては引け目を感じる。楽をして早く上達できる近道はないものだろうか。

外国語上達法については、古来さまざまに論じられてきた。しかし、実は、我々が本当にそのとおりに実践して成果の上がるような方法論は、やはりなかなか書かれ難いものだと思う。つまり、語学習得の才に長け過ぎた達人の説く方法は、往々にして、自身の成功の背景にあった特殊条件の客観的分析を省略し、一般人にはそのままでは適用できないものとなっているおそれがある。たとえば、シュリーマンの推奨する方法¹⁾を実践するには、よほどの「情熱」が必要だろう。また、語学に限らず、ものを教えること一般に共通することとして、自分が習得に苦勞した経験のない天才肌の達人、どうしたらできるようになるのかをあれこれ考える以前にできるようになってしまっていたような人は、凡人がどこでなぜつまづくのかを実感として理解できず、教師としては必ずしも優れていない場合がある。かといって、語学の本当に不得手な著者では、実効ある「上達法」を書くことはおぼつかない。凡人の苦勞を自身の体験として知っており、かつ、なんとか結果的にはある程度以上の語学能力を獲得したような者が、自身を含めて多くの学習者の困難はなぜだったのか、また、なぜ「彼ら」は楽々と習得できた（ように見える）のかを客観的に観察して記述した場合のみ、実効ある「上達法」となるのではなかろうか。

外国語が苦手である、と自ら称する著者もある²⁾が、それは、謙遜というよりも、ソークラテース的な「無知の知」としての実感なのかもしれない。傍目には語学の天才と映るような人たちでも、我々との違いは、本質的なものではなく、程度の差に過ぎず、それなりの時間と労力³⁾を費やさなければ、熟達は不可能なものらしい。努力要らずの秘訣の伝授を期待していた我々は、がっかりしてしまう。

しかしながら、外国語を学ぶということは、個々の言語の十全な運用能力の獲得までを常に

目指すべきものなのだろうか。「マスターする」こととは別次元で、各種の言語について、初等文法程度のレベルで広く浅く知っておくことも、それなりに役に立つ技能である。高度なレベルにまで習熟を目指さず、各言語の概要を、単なる「知識」として理解すること。我々は所詮、各人各時点での必要と興味の程度に相応したレベルを超えては上達できないものだ、と見切りをつけて、気軽に諸言語をかじってみること。それなら、「習うより慣れよ」式の時間・労力・努力は避けて通れるはずだ。

「外国語を少し話せる者は良く話せる者よりも多くの喜びをそれを感じる。楽しみは一知半解の徒のもとにある」⁴⁾。

2.1.2 書かれ難きもの、特殊言語マニュアル
従来から、洋書の目録作成業務の手引書として、実用的な語学マニュアル類は各種公刊されてきた⁵⁾。ただし、場合によっては、求める事項がとりあげられていなかったり、より詳しい解説のないことを不足に感じることもある。限られた紙面での取捨選択で、優先順位の低い情報は切り捨てられざるをえず、特殊言語⁶⁾についての説明は簡略に済まされがちとなるのだろう。

特殊言語の目録処理技術を解説した文献は、管見するところ、あまり多くは発表されていないようだ。書きにくいテーマではある。多様な言語による資料を日常的に多数扱っている、専門性の高い図書館にとっては、本稿で言及しているような例は、「そんなことはとっくに知ってるよ」という、改めて論じるまでもない自明の「常識」に属することがらばかりだろう。逆に、一般の図書館では、実際に特殊言語資料を扱う件数が少なく、切実な需要がない。たいていのものは、なんとかその場しのぎでも一応の処理はできてしまう。つまり、せつかく解説文書を書いても、いずれの役にも立たないということにもなりかねない。しかし、特殊言語資料日常多数取扱館でも、担当者の異動等がある。誰しも最初は初心者であり、業務の一貫性を保つためにも、文書化された語学マニュアルは有意義ではなかろうか。一般館でも、業務の品質・効率を高めるべく、日頃から語学に関する技能・知識を培っておくことが望ましい。

2.1.3 「習うより慣れよ」への異議

「習うより慣れよ」(Practice makes perfect) は、中級者が習熟を目指す場合には有効かもしれないが、初学段階にあつては、「習ってから慣れろ」(Learn before practice) と主張したい。やみくもに「習うより慣れよ」を実践するのは、地図を持たずに山に登るようなものだ。楽な近道のあるのを知らずに険しく遠回りな道を進めば時間と体力を余分に消費していき、やがて道にも迷い、ついには遭難(中途放棄)に至ることもある。我々の語学マニュアルは、個別言語の習得を支援するような「地図」でもありたい。あらかじめ「山」の概要を展望しておいてから実際に着手した方が効率も良く、また、中途挫折の割合も減るのではないかと、豊富な挫折経験に基づく筆者の感想である。

「習うより慣れよ」ばかりが語学学習ではないことは、発音指導でも例証される。たとえば英語の l と r の区別を、一般参加者にその場で習得させて見せるテレビ番組を、筆者も何回か目撃したことがある。一般に発音は、音声学的な、つまり、口の中で舌をどこに接触させて、といった類の具体的な解説と、それに基づく適切な練習方法の指導さえあれば、たいていの人は容易に習得可能なはずのものなのだ。にもかかわらず、往々にして、「この音はこの言語に独特で、日本語の類似音とは区別しなければならない」と述べておきながら、どこがどう違うのか、具体的にどんな練習をすればできるようになるのかの説明を怠り、ただ単に、「母語話者(native speaker)の発音を良く聞いて模倣するように」という指示だけで済ませている場合がしばしば見受けられる。しかし、通常の成人学習者は、耳から聞いただけでそれが発音できるようになどなるものではない。長年現地に在住し、かなり淀みなく会話できるにもかかわらず、いつまで経っても発音から外国人なまりが消えないといった実例は珍しくない。また、巻き舌の r の発音を「他のヨーロッパ諸言語の r と同じ」だからと称して、その習得・練習方法を解説しない個別言語学習書も多い。

2.2 技術的知識としての実用語学

2.2.1 語学的知識の有用性

多数の言語の概要を知っておくと、いろいろな場面で役に立つ。たとえば所蔵調査には、西洋人名のラテン語形と諸国語形の対応の知識や、基礎的な翻字法を習得しておくことが有用である。図書館情報学の授業科目にも、もっと語学を取り入れるべきである。図書館以外の出版・印刷・翻訳・学術・報道・行政等の諸場面にも必要である。たとえば人名・地名の適切妥当なカタカナ表記を、現地音に基づいて考える際にも、語学は不可欠である。

不案内な言語に対処する必要に迫られたとき、最小限の時間と労力しか費やさずに、かつ、ある程度の水準は確保しつつ、とりあえずの処理をおこなう技術は、今後、開発・研究されていくべき分野といえる。編集・校正・索引等についての市販の各種手引書を見ても、外国語の取扱技法についてはあまり言及されていないようだ。出版物その他における、外国語関係の誤植の多さは、日頃我々の目にするとおりである。たとえばアメリカの小説や映画には、しばしば、中南米系の登場人物がスペイン語のせりふを発する場面があるが、その日本語訳やカタカナ表記の発音が初歩的な誤りだらけという類の事例は、不勉強な翻訳家に代わって編集者・制作スタッフが校正で訂正してやれば、かなり減らせるはずだ。スペイン語では、文字vの発音はbと同一であり、カタカナへの転記に「ヴ」を用いるべきではないとか、現代ギリシア語では、文字βの発音は[v]だとかいう類のことを、単なる知識として知っているだけでも良い。

半可通の語学力でも、それなりに役に立つ。少なくとも、洋書目録作成の実務には大いに役に立つ。それ以外の図書館業務にも有用である。あまり自信のない言語で書かれた事典類でも、臆せず使ってみれば、固有名詞の調査等に威力を発揮するものだ。ひるがえって各自、自身の母語について改めて考えてみれば、万人が自由自在に名文を書けるわけでもないし、また、ひとつの言語のあらゆる単語を知っている個人というものも存在しないことが理解されよう。カタコトからペラペラまで、語学運用能力

の格差は、質的というよりも量的な差異に過ぎないと思えば、完璧主義に陥らずに使ってみる励みにもなる。

2.2.2 目録作成に必要な「語学力」のレベル

通常の洋書目録作成業務をこなすには、個々の言語の運用能力に習熟している必要はないと思う。もちろん、習熟していないよりはしていた方が作業能率その他の面で望ましい。とはいえ、両者の作成する目録の品質に顕著な差異が現れる事例は、むしろ稀ではなからうか。特に、近年のように、NACSIS (National Center for Science Information Systems: 学術情報センター) の総合目録データベースの充実により、既存の書誌レコードをそのまま、あるいは若干の加工を施して流用するだけで処理できる資料の割合が増えてくると、旧来の意味での語学力(運用能力)の必要性は、ますます低下しつつある。逆に、相対的に意義が高まってきたのが、所蔵館の少ない(ユニークな)書誌の登録を、いかに促進するか、またその品質水準をいかに確保するか、という問題である。

特殊言語による資料の登録を奨励・支援するためにも、語学マニュアルの拡充が必要となる。電算機の効用で、旧来のカードや冊子体の目録に較べて、同一または類似書誌を発見する検索は、飛躍的に容易となっている。類似書誌の流用を高い頻度で期待できる近年の環境下では、目録作成に必要な特殊言語処理技能というものも、かなり簡易なレベルで用が足りるのではないかと考えられる。特殊言語資料の目録整理は、ともすれば、後回し、棚上げとされかねない。また、総合目録・ネットワーク化の時代への過渡期にある現今、特殊言語の目録法や索引の標準化も急務である⁷⁾。

ある言語の初等文法をひとつおりの学習して、さて原書を読もうとしても歯が立たなかった、あるいは、第二外国語として履修したことになるのに、新聞も読めない、手紙も書けない、そんな経験にころころあたりはないだろうか? 少なくとも筆者の場合はそうだったし、その後もあまり進歩していない。しかし、それでもたとえば、対訳テキストをまず用意して、訳文を先に読んでからそれにあてはめて原文をなぞっていけば、おおよそ理解することはでき

る。自力ではろくに読めもしない言語でも、誤植や誤訳の判断は、ある程度できるものだ。

翻字を必要とする特殊言語の目録作成も、総合目録中に該当または類似書誌をまずみつけて、記述の各項目に対応する箇所を現物中に順次さがしていけば、おおむね納得できる。自力ではあいまいにしか翻字できなくとも、同一書誌かどうか判定し、簡単な修正を加えるくらいはできるものだ。ときには、良くわからない部分が残ってしまうこともあるかもしれないが、利用者の検索および識別同定に支障のない範囲内なら、「まあだいたいこんなもんだろう」という程度の目録ができれば、実用上はそれでじゅうぶんなのである。

2.2.3 語学マニュアルのコンセプト

ある言語をみごと「マスターする」ことを、高さ100にたとえてみよう。そして、通常の語学学習を、坂道を登ることに見立ててみる。登るには気力・体力を要するので、多くの人は、10か20まで登ったところで力尽きてしまう。中には、もっと高いところまで登れる者もあるが、滑り易い傾斜路なので、ずり落ちないようにしがみついているだけでも努力を要する。せつかく苦勞して中級レベルまで登っても、日頃使う機会がないと、いつのまにか位置が下がっている。

他方、筆者の提唱する語学マニュアルは、梯子に見立ててみたい。坂道を避けて、最短距離に近くなるような場所に立てかける。坂道を登るだけの気力や体力がない人でも大丈夫。ただし、あまり長い梯子を製作することは技術的に不可能なので、せいぜい20か30までしか登れない。それでも、当面の課題に対処する用には足りる。足元はいくぶん危なっかしいかもしれないが、用が済んだらすぐに降りるつもりなので、慎重に事を運ばばなんとかなる。いつも梯子に頼ってばかりいるので、手元に梯子がないときは、初歩的なことも処理しかねるが、反面、こういう補助器具があるおかげで、いろいろな種類の坂道を横から眺めた経験があるので、坂道自体を登った実体験はなくとも、隣近所の坂道の様子も、なんとなく類推で見当がつく。筆者の構想する語学マニュアルのコンセプトは、このようなものである。

2.3 翻字法入門の提案

2.3.1 用語の確認

狭義の「翻字」(transliteration)は、ある言語の通常の文字体系で表記されたものを、他の文字体系に移し換えることを指す。もとの文字と変換先の文字とを規則的に対応づけることを基本とし、理想的には、翻字された文字からもとの文字への再変換が、機械的な置き換えだけで一義的におこなえるものである。

これに対して、「転写」(transcription)は、ある言語の発音を、別の言語の文字体系の中で書き表すことを指す。発音を媒介にするため、もとの文字と変換後の文字との対応は複雑になる。また、変換先の言語体系になじむ綴字が選択されるため、変換先の各言語毎に微妙に異なった方式となる⁸⁾。「転写」のうち、変換先の文字がラテン・アルファベット(ローマ字)である場合が、「ローマ字化」(romanization)である。

狭義の「翻字」(発音よりも文字の規則的対応を優先)は、文字の対応よりも発音を優先する「転写」や「ローマ字化」と対立する概念だが、広義の「翻字」には、transcriptionやromanizationも含まれる。本稿でも「翻字」という用語を主として広義の意味で用いている。

2.3.2 LCとISO⁹⁾

書誌データの流通上、現在最も普及している翻字法は、LC(Library of Congress:米国議会図書館)の方式¹⁰⁾だろう。多種類の言語に対応しており、また、長年の実績で適用例の蓄積も豊富である。ただし、発音を(英語式に)ローマ字表記する、という伝統的な発想に基づく部分が多い。他方、国際標準化機構(ISO)の方式には、文字の規則的対応優先の、狭義の「翻字」への志向があり、LCの方式と一致しない箇所が少なくない。書誌データの国際交換や、索引情報の普遍的管理という観点からは、ISOの方式が原理的には優れている。将来的には、LCとISOとの調整・統一が希求される。

ところで、情報機器環境がもう少し進歩して、多くの文字体系をあるがままの形で、手軽容易に処理できるようになれば、翻字の問題が無意味になる可能性も考えられる。しかし、諸

言語による索引情報を一元的に管理したり、図書の配架記号の整合性を確保したりといった、一次元の配列を要する場面が残る限り、翻字も必要であり続けるだろう¹¹⁾。

2.3.3 翻字法入門の必要性

現行の翻字の諸方式は、多くの場合、発音をローマ字で表すという要素が（程度の差こそあれ）加味されたものとなっている傾向がある。そのため、もとの文字を機械的に1対1でローマ字に置き換えていくだけでは済まず、発音や文脈を媒介とした細則が加わり、複雑になる。翻字表は、その言語をある程度は知っていないと、十全には使いこなせない。

翻字表の目的は、翻字の一貫性を確保するための基準・規則を示すことにあり、当該言語自体の基礎知識は、使用者各自が別途習得するよう期待されている。他方、一般の学習書・入門書は、翻字についての具体的な疑問に必ずしも十全に対応できるものではない。学習書・入門書の「文字と発音」のページがあまり言及していないような事項を補足し、翻字表への架け橋となるような手引、すなわち、「翻字法入門」にあたるものが必要となる。

2.4 翻字法入門の試作

2.4.1 基本となる文字体系の種類

文字は、言語系統の相違を超えて借用され、広く伝播してきたものなので、文字体系の種類は、言語の種類に比べて、はるかに少ない。キリル文字、アラビア文字、デーヴァナーガリー文字を基本として確認しておけば、あとはその応用として、かなりの範囲に類推が効く。さて、日本語の表記体系を客観的に顧みて、もし自分が日本語を全く知らない外国人で、今からこれを学習し始めるところだったら、と想像してみてもいい。この極めて複雑な表記体系¹²⁾を、日常使用して生活できてしまっている事実を思えば、現代の世界の文字で、おそるに足るものなどないような気さえしてくる。

キリル文字については、先行文献¹³⁾にも解説があるので、本稿で改めて付け加えるべきこともあまりない。1対1に近いかたちで逐字的に置き換えていけば済む点は容易だが、(変換元の)諸言語で互いに微妙に異なる部分があるこ

とや、昔の綴字法には留意する必要がある。たとえば筆者は、既存書誌中のиのローマ字転記がyとなっていたのを、うっかりiに「訂正」してしまいそうになった経験がある。ロシア語ではなくウクライナ語なので、yのままで正しかったのだが。

2.4.2 アラビア文字

右から左に向かって横書きする。母音は補助記号で表記され、子音と対等な「文字」のうちに数えられていない。また、母音が書かれるのは、学習書や、朗読されるべきものである『コーラン』(al-Qur'ān)等の、特殊な場合に限られる（日本語で漢字にふりがなを付記するようなもの）。辞書を引くには、活用形や派生語から接辞を取り除き、語根（通例3子音から成る）を見抜く必要がある。筆者の場合、アラビア語文法はどうも難しくて良くわからないので、辞書を引く際は、語頭のm, t, y等は語根と関係ない接頭辞に属する人が多いから取り除いて、というような機械的な発想で見出語の見当を付け、列挙されている派生語の語形と意味を見比べて、あてはまりそうなものを拾っていくという、たどたどしい方法で対処している。アリフ(alif)および半子音w, yが、語根子音か否かを判別するのが、最も困難を感じる場所である。

アラビア文字は、イスラーム文化圏にひろく普及し、ペルシア語、ウルドゥー語等も、これに若干の修正を加えたものを用いている。トルコ語、マレー語、スワヒリ語等は、現在ではローマ字で表記するが、つい数十年前まではアラビア文字を使用していた。

更に、ヘブライ文字は、外見はかなり隔たっているが、右から左に横書きで、母音が通常表記しない補助記号であることをはじめ、構成原理もアラビア文字と共通している。

2.4.3 インド系諸文字

インドの諸言語の文字は互いに似通っている¹⁴⁾。また、チベット語、ビルマ語、タイ語等、南アジアの諸言語も、古典語サンスクリットのデーヴァナーガリー文字を原型として派生した文字を使用している。サンスクリット文法は非常に複雑だが、とりあえず文字だけ学んでおけば、多数の言語について類推が効くように

なって便利である。

デーヴァナーガリー文字は、左から右に横書きする。音節単位でひとかたまりのブロックを形成する。母音で始まる音節には母音文字が用いられるが、子音で始まる音節の母音は、補助記号で表記される。母音記号の多くは、子音文字の右または上下に添えられるが、短母音 *i* は左に書かれる。文字の上部をつなぐ水平線と、音節毎の垂直線（文字によってはこれを欠く）は、音節毎のブロックを支える枠線のようなもので、それ自体には音価はない。子音連続を表記する「結合文字」が多数あり、一見複雑に見えるが、その大部分は、単独文字から縦横の枠線を取り除いたものの組み合わせに過ぎない。サンスクリットの文字配列は、音声学的に体系的に整理されており、日本語の五十音図も仏教経路でこれを取り入れたものであることを想起すれば、辞書の文字配列も見当を付けやすい。

3. タイ語早見表の試作

3.0 タイ語を例に択んだ理由

タイ語は、日本でも複数種類の学習書が刊行されており、その入手も比較的容易である。他方、タイ文字は、世界の文字の中でもかなり難しい部類に属する。表音文字ではあるが、文字と発音との対応が複雑である。本稿でタイ語を例として択んだ理由は、そのように「難しい」言語でも、かろうじて辞書が引けて、とりあえず翻字ができる程度の用途に限定するならば、コンパクトな早見表のかたちに還元できる、という実例を示すのに好適と判断したためである。以下では、既存のいくつかの学習書から要点を抽出し、よりプラグマティックな早見表のかたちに再構成を試みる。

3.1 音素¹⁵⁾

子音音素は、表1のとおり¹⁶⁾。21種類ある。母音音素は、表2の短母音9種類のそれぞれに対応する長母音があるので、計18種類。声調は、5種類を区別する(図1)¹⁷⁾。

3.2 文字

タイ文字は、左から右に横書きする。子音を表す文字が44個ある。母音は、独立した文字

ではなく、子音文字の上下左右に記号を付けて表記する。また、文字の上部に記号を付記して声調を表す。単語の分かち書きはしない¹⁸⁾。

それぞれの文字や記号は、単独で特定固有の音価や機能と1対1で対応しているよりも、他の文字や記号と共に使用されて初めて、それぞれの組合せに応じて発音が決定する場合が多い。

3.2.1 子音文字

子音文字を、辞書の配列順に示すと、表3のとおり¹⁹⁾。うち、2文字は現在使われていない廃字(3番目の ๒ と5番目の ๕)である。子音文字は、声調との関係で、3種類に区分される。すなわち、表3で、実線で囲んだ文字が「中子音」、点線で囲んだのが「高子音」、その他が「低子音」である。同じ発音の文字が複数あり、語源等に基づく正書法に従って書き分ける。表3では各文字の下に、音節初頭での発音をローマ字²⁰⁾で付記した。同じ文字でも、音節の初頭と末尾とでは音価の異なるものが多い。表1をLCのローマ字化方式で書き換え、音節初頭と音節末との発音の対応を加味すると、表4を得る。実線で囲んだ各グループは、音節末では ๐ で囲んだ音になる。なお、音節初頭での音価が ๑ である文字は2種類あるが、音節末では ๒ は n 、 ๓ は i (複母音の後半の半母音)である。

3.2.2 母音記号

表2をLC方式のローマ字で書き換えると、表5を得る。基本的な母音記号を、辞書の配列順に示すと、表6²¹⁾のとおり。これらの記号が相互に、または、文字 ๒ 、 ๓ 、 ๐ とも組み合わせられて、母音を表記する。たとえば文字の左の ๑ 、文字の右の ๒ は、単独ではそれぞれ、 ē と ā を表すが、この2つを同時に使った $\text{๑}—\text{๒}$ は ēā ではなく、 ao という母音を表す。つまり、 $\text{๑}—\text{๒}$ という組合せでひとまとまりの母音記号であって、単独の ๑ や ๒ とは関係ないと解した方がわかりやすい²²⁾。 ๔ は、短母音化を表すが、声調記号があると消える。 ๕ は、音節末の声門閉鎖音を表し、同時に母音が短くなる。

組み合わせられた母音記号と、そのローマ字化を、辞書の配列順序に従って示すと、表7のとおり²³⁾。母音記号の表記が無いときは、音節末

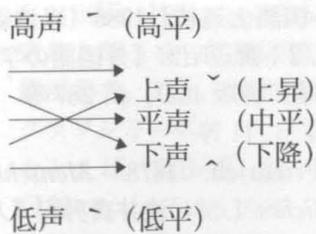


図1 5種類の声調

表8 声調の決定

		中子音	高子音	低子音	
				長母音・複母音	短母音
無記号	平音節	平声	上声	平声	
	促音節	低声		下声	高声
	´	低声		下声	
	˘	下声		高声	
	ˉ	高声			
	ˊ	上声			

が子音（声門閉鎖音以外の）ならば母音oを想定して読み，母音²⁴⁾ならばa（まれにはō）が想定される。ただし，子音連続の場合もある。LCは，辞書を典拠として確定するよう指示している²⁵⁾。

ṛ, ṝ は，伝統的には母音の系列で扱われるが，辞書ではそれぞれ，ṛ, ṝの次に配列される音節文字である。ṝは，単独ではru, ri, roe²⁶⁾のいずれか（語彙毎に決定する）；ṝの組合せのときはrūを表す。ṝは，単独ではlu;ṝの組合せのときはlūである。

また，子音文字ṝは，場合によってさまざまな音を表すが，母音の発音に影響する場合もある。同一音節内に別の子音が先行し，かつ，この文字自身が音節末の場合は，onと読む。2文字並べたṝṝは，音節末ではan，同一音節内に別の子音が後続する場合はaと読む。

3.2.3 声調記号

声調記号は4種類ある。同じ声調記号でも，組み合わせられる子音（音節初頭音）の種類等に応じて，表8²⁷⁾のように，別々の声調に対応する。なお，「平音節」は，音節末が鼻音/m, n, ŋ/または長母音または複母音の音節を指し，「促音節」は，音節末が閉鎖音/p, t, k, ʔ/の音節を指す。

文字ṝは，低子音の文字の前に書いて高子音としての声調を表す記号として用いられることがある。そのときはhの音価はない。文字ṝは，低子音ṝの前に書いて中子音としての声調を表す記号として用いられることがある。そのときは´の音価はない。

3.2.4 その他の記号

それぞれの機能とLCのローマ字化規則を示すと，下記のとおり：

記号 機能 LC

ṝ 省略記号 「…」
 なお，「等々 (etc.)」を表すṝṝは，「la」とローマ字化する

ṝ 繰り返し記号 先行音節を2回綴る

ṝ 黙字記号²⁸⁾ 該当部分を無視する

この他，タイ文字には数字専用の文字もある：

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
 ๐ ๑ ๒ ๓ ๔ ๕ ๖ ๗ ๘ ๙

3.2.5 特殊な読み方

以上述べてきた以外に，さまざまな特殊な読み方をする場合がある。たとえば，

- a) ṝは通常はthだが，ときにはdを表す。
- b) ṝṝの2文字を並べてひとつの音「s」を表す場合がある。
- c) 1個の子音文字を，音節末と次音節の初頭との計2回読む場合がある（一字再読）。
- d) 表記されている文字を発音しない場合がある。
- e) 長母音はしばしば短母音化し，短母音はときどき長母音化する。
- f) 表記されているのと異なる声調で発音される語もある。

タイ語の文字の読み方には例外が山ほどある。これを，「例外規則」として場合分けして列挙していくと，あまり実用的ではなくなる。頻度の高い主要なものだけをひととおり見ておく²⁹⁾にとどめ，あとは必要の都度，辞書で確認することにした方が効率が良い。我々としては，「なんだか理由は知らないが，この単語は辞書によると，こういう綴りを書いてこう発音することになっているから，翻字はこうなるのか」と納得する程度で可としよう。

3.3 その他

3.3.1 辞書の引き方³⁰⁾

辞書の見出し語は、発音に関わりなく、綴りに現れた文字によって配列されている。まずはじめに語頭の子音文字を見る（子音の左側に書かれた母音記号は後回し）。次に語中の母音記号を見る。

3.3.2 暦、その他³¹⁾³²⁾

タイの仏暦は釈迦が入滅した年を元年とし、西暦に543年を足すとその数字を求めることができる（たとえば西暦1994年は仏暦2537年）。ただし昔は、4月1日が元旦だったので、たとえば仏暦2473年は、西暦1930年と等価ではなく、1930年4月1日から1931年3月31日までの1年間を指している。1941年以降からは、新年の開始日は1月1日に変更された。

4. 結語

良く知らない言語による資料が、処理を要するものとして既に手元に回ってきているとする。当該の言語をまともに学習しているだけの時間的余裕もないし、その意欲もなく、また周囲の人々も自分同様、その言語を解さない、そんなとき、すぐに頼れる早見表のような語学マニュアルがあれば便利だろう。各個言語についての学習書が、それなりのページ数を要しているのは、読み・書き・話すといったプラクティカルな運用能力を漸進的に習得させるべく、例文や練習問題を盛り込んでいるためであって、かろうじて辞書が引ける程度を目標とするなら、必要事項は、少数の単純な規則に還元できる。

このような「実用」語学の開発・普及により、図書館をはじめとする（が、それらに限らない）諸分野の現場での時間と労力を節減するとともに、業務の品質を向上させることをも目指したい。

注

1) Schliemann, Heinrich『古代への情熱：シュリーマン自伝』村田数之助訳，第31刷改訂，1976（岩波文庫，青420-1）pp. 25-37

- 2) 千野栄一『外国語上達法』1986（岩波新書，黄版329），p. 2；渡辺照宏『外国語の学び方』1962（岩波新書，青版462），p. 287等
- 3) 渡辺，前掲書，p. 11等
- 4) Nietzsche, Friedrich, 1878. *Menschliches, Allzumenschliches*. I, 554. 浅井真男訳『人間的な，あまりに人間的な』（上）東京，白水社，1980（ニーチェ全集，第1期第6巻），p. 383
- 5) 語学マニュアルの現状については，林 哲也“語学マニュアルの拡充に向けて：辞書の引き方を例として”『現代の図書館』32(2)，1994，pp. 148-153の中で展望しておいた。
- 6) 国家レベルの公用語や，何千万もの話者人口を擁するものも含めて，「特殊」呼ばわりするのも妙な気がするが，日本で一般に学習機会が少なく，従って，その処理能力を持ち合わせている者も少ない言語を，便宜的に「特殊言語」と称することにする。
- 7) ハングル資料研究会“「ハングル資料の収集・整理・奉仕に関する調査」結果概要”『図書館雑誌』88(3)，1994.3，pp. 173-176
- 8) 秋月孝子“ロシア語アルファベットのローマ字翻字について”『スラヴ研究』no. 22，1978，pp. 252-263，および折込の別紙1葉
- 9) 宮澤 彰“翻字，ローマ字，ISO”『現代の図書館』30(3)：特集「標準化活動の概要：ISO/TC 46の動向を中心に」，1992，pp. 191-195
- 10) *ALA-LC romanization tables: transliteration schemes for non-Roman scripts / approved by the Library of Congress and the American Library Association; tables compiled and edited by Randall K. Barry. Washington, Library of Congress, 1991*
- 11) 原綴のままの処理を主体としてもなお，ローマ字翻字の必要な場面が，ある程度は残ることについては，鈴木裕子“朝鮮語図書の手帳による目録公開について”『アジア経済資料月報』24(2)，1982. 2，pp. 71-80のp. 74を参照。また，この記事は，ハングルとローマ字を1対1で対応させる韓国文教部方式と，発音優先のMcCune-Reischauer方式との対照，更に，ハングルのまま索引を編成することの得失の検討についても具体的に紹介している。
- 12) 日本語の表記体系は特異である。ただし，日本語そのものが特殊というわけではないことについては，角田太作『世界の言語と日本語：言語類型論から見た日本語』東京，くろ

- しお出版, 1991, pp. 225-237 を参照。
- 13) 宮島太郎『ロシア語図書目録法入門』東京, 龍溪書舎, 1981 (図書館整理技術研究会モノグラフシリーズ, 1), 特に, pp. 103-111
 - 14) たとえば, 丸山昭二郎, 井上哲也共編『洋書目録マニュアル』東京, 日本図書館協会, 1970 の pp. 158-159 を一瞥すればわかるとおり。
 - 15) この項では, IPA (International Phonetic Alphabet: 国際音声記号) に準拠して整理した。ただし, 個別言語で語の意味の弁別機能を担って識別される音韻論 (phonology) 上の単位としての音素 (phoneme) であり, 物理的な音声 (sound) を音声学 (phonetics) 的に必ずしも正確な記号で表したわけではない。
 - 16) 音声記号 ʔ は, 声門閉鎖音 (glottal stop) を表す。この音声は, 日本語でも, 驚いて「あっ」と叫んだときの母音の前後で観察される。(タイ語に限らず一般に) いったん息を止めた状態から母音を発すると, 大なり小なり, 母音の前に声門閉鎖音が現れる。
タイ語では, 母音で始まる語の存在は許されない。語頭に通常の子音が無いときは, 声門閉鎖音が補われる (辞書は文字 ʔ の項で引く)。同様に, 単語が短母音で終わることは許されず, 語末の短母音には声門閉鎖音が付く。
LC のローマ字化では, 語頭と語末では無視, 語中では ‘(ayn) で表記される。
 - 17) タイ語のローマ字表記で, 声調を表すときは, 通例, 母音の上部に符号 (低声は ˘, 下声は ˙, 高声は ˊ, 上声は ˋ) を付ける (平声は無記号)。なお, LC の方式では, 声調は無視する。
 - 18) ローマ字化にあたっては, 通例, 分かち書きを施す。LC のタイ語ローマ字化規則は, 前掲 *ALA-LC romanization tables* では, pp. 176-191 の計 16 ページあるが, うち, 12 ページ余を分かち書き (word division) の規定が占めている。
 - 19) 坂本恭章『タイ語入門』東京, 大学書林, 1989, p. 23 をもとに再構成。
 - 20) この項以降, ローマ字は, LC の方式によるものを用いることにする。
 - 21) 河部利夫『基礎タイ語』東京, 大学書林, 1967, p. 262 より引用 (ただし, 冒頭に ๒ を追加した)。
 - 22) 坂本, 前掲書, p. 20 の説明より流用。
 - 23) *ALA-LC romanization tables*, p. 176 の母音の一覧表 (音節文字 ɨ, ɨ を除く) を, 辞書の配列順序に従って並べ替え, かつ, 子音の代用としての文字 ʔ を一に置き換えると, 表 7 を得る。なお, ๒ ʔ は, LC の表にはないが, 学習書には通例掲載されているようなので, 追加しておいた。
 - 24) 短母音に声門閉鎖音が付いたものを含む (注 16 参照)。
 - 25) *ALA-LC romanization tables* の p. 178 では, 適用規則の Romanization, 5 として, ‘… depending on the pronunciation as determined from an authoritative dictionary, such as the Royal Institute’s latest edition (1982)’ としている。
 - 26) 富田竹次郎『タイ日辞典』天理, 養徳社, 1987, p. 29 によると, roe と発音する語彙は 1 語だけしかないらしい。
 - 27) 坂本, 前掲書, p. 27 をもとに再構成。
 - 28) 黙字記号は, 外来語等の語源の綴に含まれていた音を, 発音はしないが表記には反映させるためのものだが, 複数の文字を黙字化するときも 1 個の黙字記号で代表させて済みますので, 注意が必要。
 - 29) より詳しくは, 富田, 前掲書, pp. 7-31: “I, 3 タイ国語の文字と発音の概説” で, 来歴も含めて知ることができる。
 - 30) 河部, 前掲書, pp. 262-263 “辞書の引きかた” を参照。
 - 31) 丸山昭二郎編『洋書目録法入門. マニュアル編』東京, 日本図書館協会, 1988 (図書館員選書, 7), pp. 90-91, および, 末廣昭“タイの暦法と干支”『「こよみ」と「くらし」: 第三世界の労働リズム』(小島麗逸, 大岩川嫩編) 東京, アジア経済研究所, 1987 (アジアを見る目, 73), pp. 52-58 を参照。
 - 32) 現代タイの姓名については, 園部益子“タイ: 「姓名法」制定から八十年”『第三世界の姓名: 人の名前と文化』(アジア経済研究所・企画; 松本脩作, 大岩川嫩・編) 東京, 明石書店, 1994, pp. 123-131 を参照。

<H.6.5.26 受理 はやし・てつや

筑波大学附属図書館情報サービス課共通書庫係>